



「姑蘇繁華図」と「清明上河図」の比較

戴 立強（中国 遼寧省博物館・副研究員）

中国の絵画史上、社会生活を表現する風俗画は、その豊かな内容、独特な美意識、リアリズムという手法などで知られている。宋朝・張昞端の「清明上河図」と清朝・徐揚の「姑蘇繁華図」はその代表作といえる。これらの作品は「長巻」(画卷)という形で当時の社会生活を表現しており、不朽の名作であると同時に、ビジュアルな資料としても価値が高く、まさに社会百科全書的な「歴史絵巻」という名に相応しい。

徐揚は、その生没年は明らかではないが、先祖代々、蘇州で生活していた。乾隆16(1751)年に乾隆帝が初めて南巡(江南地域に御幸)するとき、絵を献上したことで宮中に呼ばれ、画院の供奉になり、拳人の出身と内閣中書という職を与えられた。乾隆24(1759)年、彼は名作「姑蘇繁華図」を作画した。なお、記録に残された徐揚の作品は35点ある。

張昞端は山東東武の出身で、その生没年は不詳である。幼い頃、北宋の首都・汴梁(今の河南省開封)に遊学し、後に絵を学び、翰林待詔という職を授けられた。彼の作

品である「西湖争標図」「清明上河図」は、「神品」(最高傑作)に選ばれた。

徐揚と張昞端は平民出身の宮廷画家という共通の立場を有し、「姑蘇繁華図」と「清明上河図」は、太平無事の盛世を讃えるという同じテーマを持っている。二つの作品はともに春を描いており、ともに郊外の農村から着筆している。そこに「一年の季は春にあり、一国の計は農にある」という中国で強い影響力を持つ伝統的な理念が蘊蓄されており、二人の構想は極めて類似しているといえよう。

徐揚と張昞端は優れた技巧の持ち主であると同時に、土地の風土人情にも詳しい。その観察は詳細を究め、対象の特徴をよく把握している。彼らの生き生きとした描写は、見る者を描かれた場面に引き込むような力を持っている。「姑蘇繁華図」と「清明上河図」の両作品は、社会の現実に密着し、生活の匂いを感じさせるからこそ、芸術品としての力強さと、ビジュアル的な史料としての高い価値を持ち合わせたのである。

図1



「堀に架かった橋の上の乞食」(「清明上河図」部分図)

木製の橋の上には多くの人々が集まっている。親子の乞食に旅行者らしい二人が洪々金を与えている。右側の乞食の子供が一所懸命ねだっているが、赤ちゃんを抱いている男はさっぱり相手にしてくれない。張昞端の筆により、世の中の冷たさが鮮やかに描かれている。

図2



「大道芸人」(「姑蘇繁華図」部分図)

閭門の南、城外の埠頭では、大道芸が行われ、たくさんの見物人や、隣家の窓から眺めている店員も描かれている。若い女の子が手に長竿を握り、綱渡りをしている。小さな歩幅で足を前後に動かす様までいきいきと再現されている。この絵から、私たちは当時の生活の匂いまでも感じることができるに違いない。